

ニューヨークの世紀末

—メルヴィル、アダムズ、デュシャン—

異 孝 之
(慶応義塾大学助教授)

アメリカ文学の一九世紀末といえ、いわゆる金メッキ時代ならではの暗い自然主義文学の勃興期として語るのが、長い間、文学史的約束事だった。ただし、今日では世紀末文学を耽美主義ならぬアメリカ自然主義文学のように読み直す新歴史主義的研究さえ登場していることを考えると、まったく逆に、ではいったいなぜアメリカ一九世紀末文学を自然主義ならぬ耽美主義の文脈で語る語り方が存在しなかったかという問題に突きあたる。

なるほどオスカー・ワイルドが1882年のアメリカ講演旅行を経てニューヨーク・シティについて述べたように、アメリカ機械文明はイギリスでは考えられない魅力を醸し出したにもかかわらず、すべてがあまりに巨大で、人々がみな汽車をつかまえようとあくせくしている光景は、必ずしも美しくはない。けれども、これまで美しくないとされた部分にさえ新しい美しさを見出すところから、都市文明のジャンクヤード内部に革新的な美意識を育むところから、アメリカ独自の俗悪美学が、ひいては、のちにスーザン・ソントグによってワイルド自身とも因縁づけられることになるアメリカ版デカダンスすなわちキャンプの美学が形成されていった歴史は、否定することができない。そのように捉えかえしてみて初めて、たとえばワイルドの耽美派小説『ドリアン・グレイの肖像』と米国ロマン派作家ハーマン・メルヴィルのゲイ小説『ビリー・バッド』がまったく同じ1891年に書かれていたり、『ビリー・バッド』がのちにE・M・フォースターの手でオペラ化されたりしたという世紀末同時多発の顛末が楽しめる。このような視点に立てば、たとえばメルヴィルが1855年に発表したふしぎな二部作小説「独身男の楽園と乙女たちの地獄」と、今世紀初頭のアメリカで活躍することになるフランス系ダダイスト・マルセル・デュシャンのふしぎな未完芸術作品「彼女の独身者によって裸にされた花嫁、さえも（通称大ガラス）」(1915-23年)とのあいだに——作家間の影響関係は皆無だったにもかかわらず——いったいどうして構造的類似が生じてしまったのかという、文学史的・文化史的な謎にも、解決の糸口が見出せると思う。

もちろん、メルヴィルとデュシャンのあいだにヘンリー・アダムズを置いてみるなら、彼が1900年のパリ万国博覧会で見たダイナモに刺激を受け、中世以来のヨーロッパ・キリスト教世界を支配してきた聖母マリアの時代がダイナモの時代へ、秩序から混沌へ、統一

性から多様性の時代へパラダイム・シフトがおこっていることを報告した『ヘンリー・アダムズの教育』(1905-6年)第25章を見逃すわけにはいまい。メルヴィルからアダムズ、デュシャンへ至る精神史の糸は、それらの作家自身が既婚であるなしかかわらず、まさしく「独身者的なるものの欲望」によって「乙女たちが地獄へ墮とされる時代」から「機械仕掛けの花嫁が誕生する時代」へのパラダイム・シフトを表象する。そこには、テクノロジーの発展とセクシャリティの複合化が相互作用しながら美的感性の革命を実現していくドラマが認められる。本論では、ミシェル・カルージュやデイヴィッド・ボラッシュらサイバネティクスの独身者の機械研究、ミシェル・フーコー『性の歴史』のアメリカ版とも呼べるティモシー・ギルフォイルやジョージ・チョーンシーの都市論的性風俗史研究に立脚しながら、とりわけ一九世紀末ニューヨーク・シティを舞台にアメリカにおける都市文明と性的倒錯のあいだでいかなる記号的相互駆引が行われたかを再吟味し、その結果、アメリカならではの高度資本主義的/大量消費主義的デカダンスの様式「キャンプ美学」がいかに形成されたか、その言説史を探る。

独身者の文化は、仮に生殖的には不毛の荒地であっても、文化的にはきわめて豊饒な大地にはかならない。それは、メルヴィルからデュシャンへ至る独身者思想に強引に因果関係を読み込むことではなく、むしろメルヴィルにもデュシャンにも等しく影響していたようなもうひとつのヨーロッパ精神史の底流を想定してみる作業によって実現するだろう。具体的には、メルヴィルの前掲二部作で言及され、デュシャンの錬金術的作品でも痛烈に意識されていたにちがいない「テンプル騎士団」について、聖地と十字軍体験から創設され十二世紀から十四世紀まで活躍したこの独身騎士修道会の意義について、再検討してみるのが肝要であろう。というのも、テンプル騎士団こそは銀行業の起源であるとともに秘密結社の原型であり、「無から有を作り出す」「卑金属から黄金を作り出す」というその思想において、独身者文化と錬金術文化を、セクシャリティの論理とテクノロジーの論理を巧みに溶接していたからだ。しかもテンプル騎士団の創設メンバーが九名であったという事実は、メルヴィル「独身男の楽園」に登場する独身者の数、およびデュシャン「大ガラス」に登場する独身者の数と一致する。

ニューヨーク作家メルヴィルは、独身者文化のメカニズムを、母性さえテクノロジーで代理できるとする女性虐待の感性によって一九世紀半ばに察知し、いっぽうニューヨークへの移民者デュシャンは同じことを女装者の・仮装者の感性によって二〇世紀初頭に目撃した。ところが、ミソジニー的存在論の次元がねじれてキャンプ的美意識へ変化し、反自然によって自然を超越していくという論理の母胎自体は、歴史的にははるか昔、一二世紀テンプル騎士団以来のフリーメーソン文化によって培われたものである。そうしたヨーロッパ精神史の伝統が図らずも顕現してしまった世紀末ニューヨーク・シティは、まさにそれ自体が、最大の独身者の錬金術機械にはかならない。